
Espoir blanc-**白の希望**-

柴健

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E s p o i r b l a n c - 白の希望 -

【Nコード】

N 2 7 0 0 B A

【作者名】

柴健

【あらすじ】

病弱な少年は、若くして病によりこの世を去る。
しかし、少年は神によって新しい世界で生まれ変わる。
少年が好きだったキャラクターがいるこの世界で。
少年はもう一度の人生で何を見て、何を思い、成長していくのか？
そんな物語である。

ブローグ

少年は泣いていた。

はくらくぜんた
白楽善太は泣いていた。

この世から離れていく悲しさから。

病室のベッドの上で、家族に見守られながら。

彼は生まれてからずっとベッドの上でずっと過ごしてきた。

治る見込みのない病気にかかってしまったせいで・・・

そして少年は短い人生を終えてこの世を去っていく・・・

悔いを残して死んでいく・・・

短くしか生きることのできなかった自分に悔いを残して・・・

そんな彼に声をかける者がいた。

死んでしまった彼に向かって声をかける者がいた。

「善太、貴方の人生は終わったのではなく、始まりを告げます。」

そう、話しかけてくれたのは神様のような人だった。

と言っても、死んでしまったのだから神様だろう。

「人生を知らないで死んでしまったあなたに、一つだけ願いをかなえてあげましょう。」

そして、少年は口をあけ、言の葉を紡ぐ。

狭い世界で学んだ、言の葉を紡ぐ。

「だったら、アニメキャラクターに会える世界に行ってみたいです。」

」

少年は静かに言った。

少し、恥ずかしそうに言った。

「僕の狭い人生ではアニメとかしかなかったので。」

少年はどこか悲しげに言う。

少年は自嘲気味に言う。

「生き返らせて・・・とは言わないんですね。」

神は不思議そうに少年に問う。

「たぶん無理だと思ったからです。・・・だから、それをお願いします。」

少年は嬉しそうに、

けれど、どこか悲しげに答える。

「分かりました。それでは、これからの人生ががんばりなさい。」

少年は本当にうれしそうに眼を閉じる。

いつしか、彼の涙は笑顔に変わっていった。

少年の意識は薄れて行った・・・

これから向かう世界に行くために・・・

1 - 1 転生

．．．．．。

ここはどこだろう．．．？

善太は気がついた。

周りは自然に囲まれた森だった。

―ああ、僕は生まれ変わったんだ。

善太は嬉しそうに気持ちを整理する。

どこかに行けば好きなキャラクターに会えると思うと、嬉しくないはずがない。

善太は森の中を探索する。

そして、善太は気付く。

もう自分は病弱でないことに。

生きていた頃の苦しみは、まったく言っていないほど無かった。

善太は森を探索し続ける。

すると目の前に、スライムが現れた！

「・・・おお！！動いてる！」

驚いた。スライムがいるなんて。

まるでRPGゲームのようだった。

・・・あれ？ということは・・・

『スライムが襲ってきた！！』

えええーーーー！！なんで！？

『スライムが現れた。』

なんでゲームみたいな展開に・・・

でも襲ってきたんだからしょうがない！

武器は無いからこの拳で戦おう。

『善太はスライムに攻撃した！』

「はぁー！！」

善太はスライムを殴った。

少なからマシに戦えるだろう。

しかし、考えが甘かった。

『スライムにはあまり効いていないようだ。』

「ええー！！」

休む暇もなく・・・

『スライムの攻撃！』

スライムは善太に体当たりした！

「ぐっはっ！？・・・すごく痛いYO。」

HP的には残り1/4くらいだろう・・・。

「もうだめだ・・・おしまいだ・・・。」

善太は戦意を失った。

転生そうそう死んじゃうのかな・・・。

1 - 2 出会い

「もうダメだ・・・おしまいだぁ・・・」

『スライムの攻撃!』

「波————!!!」

突然、叫び声と共に光線がスライムに当たった。

『スライムは破裂したYO』

「おめえ、大丈夫か？」

この声は・・・

「・・・あなたは？」

「オラは孫悟空だ。」

えっ、あの？

「ところでおめえ、あぶなかったな。」

「あ、えーと・・・ありがとうございます。」

正義の味方ってカッコいいな！。

「そんじゃ、オラはこの辺で・・・」

「あの、悟空さんはこんなところでどうしたんですか。」

思い切って尋ねてみる。

「いや、オラにもよく分かんねえけど別の世界に来ちまったようだな！。」

「それじゃ、帰れるまで俺と旅をしませんか？」

「お？オラとでいいのか？」

「はい・・・。」

テッテレー『悟空が仲間になった。』

「・・・ホントにRPGみたいだなあー。」

1 - 3 覚醒

「それにしてもどうやって帰るんだ・・・？」

悟空はつぶやく。

「まあ、ゆっくりがんばりましょうよ。あははは・・・。」

「それもそうだなー。ところでだが、」

「えーと、何でしょう？」

「これから冒険していくのにおめえの戦闘力はちいっとばかり低くないか？」

「・・・確かにその通りですね。」

「ということでしたらここら辺の怪物たちで稽古つかあ！」

経験を積むってことだね。

ホントにRPGみたい・・・

「そんじゃ、いくぞ！」

「はいっ！」

『柴犬が現れた！』

「なっ・・・」

「イヌとかもでくんだなあー。オラぶったまげたぞ。まあ、戦ってみてくれ。」

「分かりました。」

『柴犬の攻撃！』

「ワンッ！！」柴犬は噛みついてきた！

「あぶなっ！？」

善太はひらりとかわした。

「おお、いい動きだ。」

『善太の攻撃!』

ちよつとできるかなあ？

まあ、試しだし。

善太はあの有名な構えをした。

「おっ!?!あの構えは・・・!」

「一度やってみたかったんだ。いくぞ、かめはめ波!!」

両手を前に突き出し、光線を発射した。

あれ・・・手から光線出てる・・・出ちゃってますけど!?

「わおーん!!」

『柴犬は吹っ飛んだYO』

「おめえもかめはめ波でるんだな。」

「えっと・・・初めてなんだけど。」

「そつか・・・オラとおんなじだな。はははは。」

『絆が深まった。』

「これで心配することは無くなったから、先進むかー。」

「はい。」

こうして二人は森を抜け、一つの村に辿り着いた。

—この力は一体・・・。

(ステージ1 クリア)

2 - 1 村（前書き）

村に着きました。

2 - 1 村

二人は村の前にある看板を見た。

「エルエス村・・・って書かれてますよ。」

「そつかあ、オラ腹減っちゃったぞ。」

悟空が大飯食らいなのはご存知でしょう。

でも大丈夫！

来る途中のモンスターから金はぶんどりました！

しかし、村に入るとなんだか騒がしい。

「・・・行ってみましょう。」

善太と悟空は騒がしいほうに向かった。

「もつじき生贄を捧げなきゃ・・・おら達の村があ・・・」

「どうしたんですか？」

善太は村人に尋ねた。

「おら達の村は一年に一度、女の生贄をアイツに捧げないと村が・・・村があ・・・」

「アイツ...って、どういう奴なんだ。」

悟空も尋ねる。

「山神さまだあ。」

「詳しくはわかんねえのか？」

「村の言い伝えだから、誰も見たことはないだあ。」

「そうなんですか。」

善太と悟空は少し考えた。

どんな奴かと。

「話の続きだが、丁度捕まえたこの女を今からエルエス山に連れていくとこだあ。」

「それって人さらし……えっ？」

善太はその女、少女を見て驚愕する。

物静かな雰囲気彼女の彼女を善太は知っていた。

「だから、私は人間が……キライ。」

2 - 2 調

生贄にされそうになっていた少女は・・・

「あなたもしかして、レンさん？」

「どうして・・・私の名を？」

黒い服に、青い髪、頭に巻いてある帯、

まちがえるはずが無い。

エレメンタルジェレイドのレヴェリー・メザールランスだった。

「・・・お知り合いでしたか？」

村人は戸惑ったように尋ねる。

「私は知らん・・・」

「そうですよ。」

一同「ええー！ー！！」

「その娘を返してください。その代わり、山神とかは倒してくるんで。」

静かな声ながらも、殺気に満ちた声だった。

「・・・オラの意見は？」

悟空もその殺気に少し引き気味だった・・・

夜 【宿屋】

とりあえず、村人たちと話を済ませて宿屋・・・

「あなたは、どうしてこんなところに？」

善太はレンに尋ねる。

「……助けてくれてありがとう。」

「おう、大丈夫だ。なっ？」

悟空は善太に言う。

「ところでおめえ、何者なんだ？」

「私はレン。レヴェリー・メザランス。」

「オラは孫悟空だ。よろしくなレン。ところでオラはおめえのなめえ聞いてねえぞ。」

そういえばと善太に聞く。

「ああ、まだ名乗ってなかったですね。僕は白樂善太です。」

とりあえず、自己紹介終了。

「質問の続きですけど、なぜ？」

「クーと旅をしていたのに、この世界にいきなり飛ばされて・・・」

レンは悲しい顔で続ける。

「村が見つかったと思ったら、いきなり捕まって・・・今に至るわ。」

「そうだったんですか。」

「私も質問して・・・いい？」

「答えられることなら。」

「あなた達はどうして私を助けてくれたの？」

「えーと、人が生贄にされているところとか見なくなかったですし。」

—少なくとも僕の世界はそういうのダメだったから。

「僕の世界って、あなたは別の世界の人なの？」

善太と悟空は今までのことを話す。

「あなたは死んでからこの世界にきて、そっちのあなたは私と同じようにこの世界に送られた・・・」

「おお、そうだ。おめえアタマいいなあ。」

悟空は感心する。

「で・・・ゴクウ？の方は元の世界に戻るために旅している・・・。」

「そうだ！」

「・・・私も連れあって。元の世界に帰れるかもしれないから。」

「・・・わかりました。」

善太は賛成のようだ。

「オラもいいぞ！よろしくなっ、レン。」

テッテレー『レンが仲間に加わった！』

とりあえず、今日は宿屋で休み、明日山神退治に行くことにした。

2 - 3 エルエス山

翌日・・・

村長と話した通り、山神を倒しに三人はエルエス山を目指していた。

「山神がどんな奴かオラわくわくすつぞ！」

悟空は乗り気のようにうだ。

「レンさん・・・大丈夫？」

「zzzz・・・なに？」

すげー寝むそう・・・

あれだけ寝てたのに・・・

「二人とも、前にモンスターいるぞ。」

そう言われ、前を向くと・・・

紫色のスライムが三体いた。

「かつ、きもちわりー、やだおめー!」

「毒々しい・・・」

「zzz・・・?・・・zzz」

『ポイズンスライム三体が襲ってきたYO』

『悟空の攻撃!』

「かめはめ波ー!」

スライムAに直撃した!

『ポイズンスライムAは破裂したYO』

『善太の攻撃！』

「おお、さすがかめはめ波。んじゃ、かめはめ波——！」

ポイズンスライムBに直撃！

「あれ、まだ生きてる。」

『ポイズンスライムBの攻撃！』

善太に体当たりしてきた！

「あぶなっ！」

『防御成功！ダメージを半減できたYO』

「おお、いてて。」

経験を積んでレベルアップしたおかげであまり痛くなかった。

『スライムCの攻撃!』

「・・・え」

スライムCはレンに毒の玉を放った!

「zzz・・・えっ?」

「あぶない、レンさん!」

善太はレンの方に走った!

『かばい成功!』

毒弾は善太に当たり、猛毒に犯された。

「はあ、ああ、苦・・・し・・・い。」

「大丈夫・・・」

「はあ、はあ、・・・え？」

レンは胸の前で両手をあわせ、詞を歌った。

「――――」

『善太の毒は消えた』

「ありがとう、レンさん。」

「・・・眠い。」

「あ・・・ははは。」

『悟空の攻撃！』

「オラも毒にならねえようにしなきゃな。」

悟空はポイズンスライムCに連続攻撃を放つ！

スライムCは避けきれない！

『ポイズンスライムCは破裂したYO』

『善太の攻撃！』

「さっきの仕返しだ！かめはめ波――！」

かめはめ波はスライムBに直撃！

『ポイズンスライムCは破裂したYO』

敵は全滅した。

「ふうー。とりあえず勝ったみてえだな。」

「レンさん凄いですね。毒を消すなんて。」

「ホントだぞ。オラおどれえたぞ。レンは魔法使えるんだなあ。」

「あれはエディルレイドの詞^{うた}。でも今のは毒を抜くことしかできなかった・・・。」

「どういことですか？」

「それが、本当だったら回復もできる詞もあるんだけど、こっちに
来てからほかの詞が歌えないの。」

「そういえば、オラもスーパーサイヤ人になれねえんだ。」

「どういことだろう・・・。」

謎の現象を不思議に思いながらも、三人はモンスターを倒しながら
奥に進んでいった。

2 - 4 アイテム屋

エルエス山 頂上手前

「・・・疲れた。」

あれから、2時間は登ってきた気がする。

悟空さんは・・・息切れすらしてねえええ。

レンさんは・・・うとうとしながらも歩いてきました。

僕って体力無いのかなあ・・・

確かにずっと病院暮らしだったけど・・・。

そんなことを思いながら歩いていると・・・

目の前に荷馬車があった。

「zzz・・・こんなところに荷馬車？」

「二人いっぞ。」

荷馬車にいる二人から声が聞こえる・・・

「なあロレンスよ、道に迷ったんじゃないかや？」

「ホロ、そんなはずないだろ、道なりだったんだから・・・って人が。おい。」

狼と香辛料の二人、ホロとロレンスだ。

「道にはぐれてるみたいですね？聞こえましたよ。」

「はい。信じがたいですが、いつの間にか別の世界に飛ばされてしまったみたいで。」

「だ・か・ら、さつきから言っておるじゃろつが。ここの空気はさ
つきの場所と違つと。」

「わかつた。まあこの世界でも行商人は続けられそうだから頑張っ
てみるか。」

「うむ、それが一番よいとわつちも思うぞ。」

話はまとまつたようだ。

「よかつたら、ウチの店で何か買つていきませんか？」

そついえば、道具とかの準備は全然してなかつた。

「じゃあ、そうさせていただきます。」

すると横から、

「ぬし様、ずいぶんとかわいらしい顔しているようじゃな？」

水口が話しかけてきた。

やっぱり美人だなあとあらためて思った。

とりあえず、冗談はさておき。

「悟空さんとレンさん何か買いますか？お金はそれなりにあるんで。」

「んじゃオラは飯がいいぞ。」

「ちゃんと買いますよ。回復アイテムなんですから。」

「私は・・・これ。」

「まくらですか・・・。」

まあこんな感じで買い物した後、ロレンスさん達とわかれて先を進んだ。

・ ・ ・ また会えそうな気がする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2700ba/>

Espoir blanc-白の希望-

2012年1月9日01時48分発行